

幸福のはさみ

小川未明

青空文庫

正吉しょうきちは、まだお母かあさんが、ほんとうに死しんでしまわれたとは、どうしても信しんじることができませんでした。

しかし、お母かあさんが、もうこの家いえにいられなくなつてから幾いくに日もたちました。正吉しょうきちはその間あいだ、毎まい日にちお母かあさんのことをおもひ出しては、さびしい日ひを送おくりました。彼かれは子供こども心こころにも、もうお母かあさんは死しんでしまわれたので、けつしてふたたび帰かえつてこられないと思おもいながら、やはりまったく死しんでしまわれたとは、どうしても思おもうことができなかったのです。あのやさしいお母かあさんが、この世界せかいのどこにも、まったくいられないと信しんじたら、そして、もうどんなことをしても、二度と見みることができないと

信しんじたら、彼かれは、悲かなしさのあまり、胸むねが張はり裂さけてしまうからで
ありました。

お母かあさんが、じつと正しょうきち吉きちを見みつめられるときは、いつも、
その真まつ黒くろな目めの中なかに、涙なみだがたたえられていたのを、正しょうきち吉きちは
忘わすれることができませんでした。

お母かあさんがいられなくなつてから、正しょうきち吉きちは、せめてお母かあさ
んの面おも影かげを思おもい出だすことを楽たのしみにしていました。空そらを吹ふく寒さむ
い風かぜも、また、窓まどを打うつ落おち葉はの音おとも、それをばさまたげるもの
はなかつたのです。

正しょうきち吉きちは、夜よるになつて、使つかいにやられるのを恐おそろしがつてい
ました。なぜなら、このごろ、父ちち親おやは暗くらくなつてから、酒さけが足た

りないといつては、町の酒屋まで酒を買いに、正吉をやつたからであります。

「なあ正吉、酒を買いにいってこい。」

夜になると、はたして、父親はいいました。月もない暗い晩でありました。星の光が降るように、青黒い空に輝いていました。そして、風が吹いて、落ち葉が田の上を、カサカサ音をたてて飛んでいきました。

もし、こんなときにいやだといつたら、きつと、父親は「意気地なしめ。」といつて、しかつたであります。正吉は、お母さんがおられたら、自分は、けつして、こんなさびしいめをみなくていいものをおもいますと、目の中に涙がわいてきたので

あります。が、

「なあ、正吉しょうきちは強いものな。いい子こだからいつてきてくれよ

。」と、父親ちちおやは、後ろ姿うしすがたを見送りみおくながら、いいました。

こう、父親ちちおやにやさしくいいかけられると、正吉しょうきちは、また

なんとなく、父親ちちおやをあわれに思おもいました。そして自分じぶんたちは、

いつまでもこんなにさびしい日ひを送おくらなければならぬのだらう

かと、悲かなしくなりました。

正吉しょうきちは、とぼとぼと町まちの方ほうをさして歩いてあるゆきました。こ

のあたりはもう日ひが暮くれると、まったく人ひと通りは絶たえてしまつ

たのです。どの家いえも戸とを締しめてしまつて、わずかに、戸とのすきま

から、内部ないぶに点ともっている燈火ともしびの光ひかりが、寒さむい、さびしい外そとの闇やみの

中に、なか幽かな光かす ひかりを送おくっているばかりでありました。

小さな、ちい田舎町いなかまちは、おなじように、早くはやから、どこの店みせも戸と

を締しめてしまいました。正吉しょうきちは、平常ふだん、歩きある慣れていました

ので、一筋ひとすじの道みちをたどつてゆきました。どこか遠とくの方ほうで、犬いぬ

のないうる声こえが聞こえたのであります。ようやく、町まちに入はいろう

としました。するとそこにお寺てらがありました。

寺てらの境内けいだいにはたくさんきの木きが植うわつています。そして、いま

は、いずれも黄色きいろに真まつ赤かに、葉はが色いろづいていました。しかし、

それらは、夜よるでありますから、ただ音おとだけが聞きこえるばかりで、

はらはらと風かぜの襲おそうたびに騒さわがしく散ちつていました。

正吉しょうきちは、お寺てらの門前もんぜんに、ただ一つ提燈ちようちんをつけて、露ろ

店を出している人があるのを遠くからながめました。夏の夜や、縁日の晩などには、よくこの町にも露店が出ましたけれど、こんなに寒くなつてからは、出歩く人も少ないので、ああして露店を出しても品物を買うものがないだろうにと、思われたのでありません。

その提燈の火は、紙がすすけているので、暗うございまして。どんな人がそこにすわっているのだろうと、正吉は思いながら、だんだんと、その露天の方に近づいてきました。風に吹かれて、落ち葉は、その火の周囲に渦巻いていました。しかし、すわっている人は、じつとして動きませんでした。

正吉は、一人の女が、さびしそうに往來を見つめてすわ

つているのを見ました。そして、提燈ちようちんのうす暗ぐらい火影ほかげで、その顔かおを見ますと、恋こいしいお母かあさんに、まったくよく似にているのでありました。

その女おんなは、前まえにむしろを敷しいて、はさみをならべていました。

そのはさみは、着物きものを縫ぬうときに入り用ようのはさみでありました。

正吉しょうきちは、しばらく、その女おんなを見つめてたたずみました。そ

して、見みれば見みるほど、恋こいしいお母かあさんの顔かおによく似にていましたので、とうとう自分じぶんを忘わすれて、正吉しょうきちは「お母かあさん。」といつて、そのそばに、駆かけ寄よりました。

すると、その女おんなは、さびしく笑わらいました。そして、しつかりと

正吉しょうきちを抱いだき寄よせました。

「わたしは、坊やのお母さんじゃありません。その証拠に、私の頭の髪は、こんなに灰色がかっています。しかし私は、坊がさびしいのをよく知っている。私が、おまじないをしてあげる。もうこれから、お父さんは、けつして、こんな風の吹く暗い晩に、坊をお使いになぞ出しはしないだろう……。」

こういって、女の人は、前のむしろの上に乗せてあつたはさみの中から、一つのはさみを取って、自分のほおのあたりに垂れかけた、髪の毛を二、三本切つて、それをば、正吉の持つていた徳利の中に入れて渡しました。そして、正吉の頭をなでながら、

「お父さんが待つておいでなさるから、早く酒を買つて、家へお

帰りなさい。気をつけて転ばないようにおゆきよ。坊が帰るまで、
 私は店を出しています。」と、やさしくいつて、正吉の顔を
 のぞきました。正吉は、お母さんは髪の毛が、もつと黒かつ
 たと思いましたが、あまりその女の人がお母さんに似ている
 ので、ただ悲しく、なつかしきで胸がいっぱいでありました。そ
 して、その女の目の中がうるんで涙でいっぱいなのも、ほんとう
 にお母さんが自分を見るときとまったく同じでありました。それ
 ですから、正吉も悲しくなつて、しくしくと泣き出しました。
 すると、女は、正吉を前の方に、押し離すようにして、
 「私にも、ちょうど坊と同じぐらいの男の子がありますの。しか
 し、おとなで、さびしがりもせず、独りで私の帰るまでお留守居

をしていますよ。坊やも、早くお家へ帰つて、お父さんの手助けをしてあげなければなりません。」といいました。

正 吉は、こう聞くと、やはり自分のお母さんではなかつたことを知りました。そして、泣くのをやめて、とぼとぼと、それから、酒を買いに酒屋の方へと歩いてゆきました。

正 吉が、徳利を下げて帰るときにも、女の人は、じつとすわつていました。正 吉は、悲しさが胸にこみあげてきて、早く家へ帰つて、また、死んだお母さんを思い出して、ぞんぶんに泣こうと道を駆け出したのであります。

父親は、正 吉が、酒を買つて帰るのを待つていました。そして、子供が、どんな悲しい思いにふけているかということ

もし知らずに、徳利を受け取ると、さつそくその酒を盃に注いで飲みはじめました。

父親は、さもうまそうに舌打ちをして飲んでいましたが、にわかにならずに盃を下に置いて、考え込みながら、

「不思議なこともあるものだ。この酒は梅の香いがする。この香いは、死んだ妻が髪の毛につけていた香油の香いそっくりだ。」
と、ひとり言をして、死んだ正吉の母親を思い出したように考え込みました。

父親のいうことを聞くと、正吉は、びっくりしました。
彼は先刻、寺の前で見た女の人が、どうしてもお母さんにちがいないような気がして、考えにふけていたやさきでありましたか

ら、このとき、彼は、あつたままを父親に話したのであります。そして、その女の人がおまじないに髪の毛をはさみで切つて徳利の中にいれたこともすっかり話したのであります。その話を聞くと、父親は、いままでの酔いがすっかりさめてしまったように、まじめな顔つきになりました。

「どれ、俺がいつてみてこよう。おまえは、家に留守をしているのだよ。」といつて、父親は急いで町の方へとゆきました。

父親は、星晴れのした空の下、暗い道を歩いてゆきました。それは、正吉の通つたと同じ道でありました。落ち葉の空を飛ぶ音が聞こえます。木の枝の風に吹かれて鳴る音が聞こえています。このとき、父親は、はじめて、こんなさびしい道を子供

をば使つかいにやったことをかわいそうに思おもつて後悔こうかいしました。

そのとき、あちらに、暗くらい提ちようちん燈てんの火ひが見みえたのであります。それは、ちようど寺てらの門もん前ぜんであつて、まだ露店ろてんが出でているのでした。

こんなさびしい、人ひと通とおりのない晩ばんに、いまごろまで露店ろてんを出だしているなんて不思議ふしぎなことだと、父ちち親おやは思おもいました。

「あすこに、その死しんだ妻つまに似にた女おんながすわっているのか。」と、父ちち親おやは、胸むねの中なかでいいながら近ちかづいてみみました。すると、それは、いつのまに人ひとが変かわつたものか、女おんなの人ひとでなくて、白しろ髪がのおじいさんが、じつとさびしい往おう来らいを見みつめてすわっていました。

父ちち親おやは、そのおじいさんの顔かおを見みると、びっくりしました。

ずっと前に、この世から亡くなられた自分のお父さんに、その面ざしが似ているからでありました。

おじいさんは、黙って下を向いていました。正吉の父親は、その前に立って、はさみを見ながら、いろいろのことを思い出していました。

「おじいさん、このはさみをくださいまし。」と、父親はいいました。

すると、黙って下を向いていたおじいさんは顔を上げました。「こう寒くなつては、どこの家でも冬着の仕度をせにやならん。このはさみを使った人は、みんなにしあわせがくるから、楽しみにしていなさい。」と、おじいさんはいいました。

正吉しょうきちの父親ちちおやは、自分じぶんは男おとこで、着物きものを縫ぬえないが、だれか
 人ひとにたのんで、子供こどもにだけなりと暖あたたかい着物きものを着きせてやりたいた
 思おもいました。父親ちちおやは、ずっと以前いぜんに、この世よから亡なくなられて、
 忘れわすれかかっていた父親ちちおやの顔かおを、おじいさんを見て、はつきりと
 思おもい出だしました。

「おじいさんも、かぜをひかないようにお大事だいじになさいまし。」
 といつて、父親ちちおやは、子供こどもが待まっているだろうと思おもつて、急いそいで
 家いえへ帰かえりました。

明あくる日ひの朝あさ、あられが降ふつて、あたりはいつそうさびしくな
 りました。その日ひ、思おもいがけなく、しばらくたよりのなかつた妹いもうと
 から手紙てがみがきました。旅たびに出でていた妹いもうとが、帰かえつてくるという知しら

せでありました。

「正吉や、叔母さんか帰つてきなさるぞ。」と、父親はさ

びしがっている正吉に向かつていいました。

「叔母さんが帰つてきなさる？」と、正吉はびつくりしたよ

うに叫びました。

正吉は、四つか五つの時分に、たいへん自分をかわいがつ

てくれた叔母さんのあつたことを知っていました。たとえ、記憶

にはほとんど残っていないにしろ、たえず心の中では慕わしく思

つていたのでありました。

正吉の家は、急に晴れ晴れとしてきました。曇つた日に、

雲間から日の光が射したように明るくなってきました。そして叔

母^ばさんは、きつと土^{みやげもの}産物を正^{しょうきち}吉^{きち}に持^もつてきてくださるばかりでなく、また帰^{かえ}つてこられたら、正^{しょうきち}吉^{きち}に着^{きもの}物を縫^ぬつてくださるであろうと思^{おも}つたばかりでも、父^{ちちおや}親や、正^{しょうきち}吉^{きち}の心^{こころ}は明^{あか}

るくなるのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

初出：「婦人界 6巻11号」

1922（大正11）年11月

※表題は底本では、「幸福《こうふく》のはさみ」となっています。

※初出時の表題は「幸福の鋏」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幸福のはさみ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>